たいとう文化発信
Culture of Taito City

たいとう文化発信マガジン

台東鳥瞰

TAITOCHOKAN

特集

彫刻家・朝倉文夫の美学
アサクリック

写真家・齋藤陽道撮り下ろし！朝倉彫塑館

雑貨・猫・SNS

若手彫塑家に見るアサクリック

たいとう・アサクリック・シーン

02 SPRING 2019

FREE

TAITOCHOKAN

アサクリック ってなんですか？

「アサクリック」は、彫刻家の朝倉文夫が自宅建築（現・朝倉彫塑館）を構想する際に残した言葉です。一見するとちぐはぐなものをまとめ上げ、美と合理性を自由な発想で同居させていく朝倉流のテクニック（美意識）を、遊び心たっぷりに表しています。今号では、この「アサクリック」をキーワードに、自然主義的な写実彫刻の名作を世に残した朝倉文夫の視点から、台東区の鳥瞰を試みます。

この鉄筋コンクリート造りというものは趣味には合わないが用途の為には仕方がない。到る処に洋風建築を見るだけは見て少し見厭きてはいるが未だゆっくり住ったことはないから、当分住厭きることもなかろう。それに鉄筋コンクリートという建築材料は何れの国のものでもなく世界的の建築材料である。それにも拘らず、いろいろな国の建築形式を拝借するからちぐはぐになるのでこれも勝手気儘なアサクリックでゆくか。朝倉文夫『未定稿 我家吾家物譚』公益財団法人 台東区芸術文化財団発行 2013 年

朝倉彫塑館に隠れた美意識と遊び心のハーモニー

朝倉文夫が設計・監督を務め増改築した朝倉彫塑館で、用と美、近代と自然の交差する「アサクリック」を探してみましょう

1 軒を枝が支えている…！ 1階軒下の意匠

形に手を加えることはせず、そのまま使われている枝。建物との調和を損なわずに、意匠としての役割を果たしています。

2 自然主義のフォルムを味わう 中庭の濡れ縁

随所に見られる曲線のデザイン。建物に有機的な柔らかさと統一感を与えています。

3 格式とユーモアのギャップ 朝陽の間

床の間にも曲線が用いられ、アクセントに変木や奇木が使われています。本来格調高い床の間にも遊び心があふれています。

4 丁寧に編み込まれた技術 天井の意匠

網代編みでつくられている床の間の天井。目にしにくい細部にも、見つけた人を楽しませる意匠が施されています。

INFORMATION

台東区立朝倉彫塑館

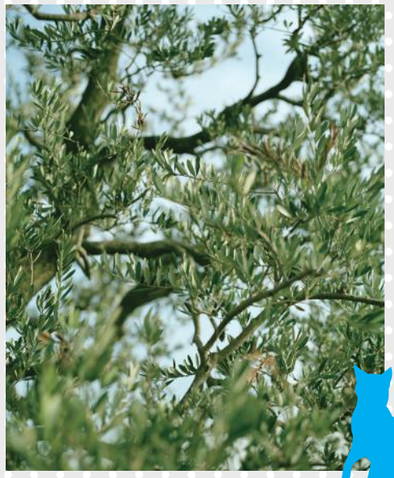
開館時間　9:30 ～ 16:30（入館は 16:00 まで）／休館日　月・木曜日（祝休日と重なる場合は翌平日）、年末年始

入館料　一般 500 円、小・中・高校生 250 円／住所　台東区谷中 7 丁目 18 番 10 号

TEL 03-3821-4549 ／ FAX 03-3821-5225

朝倉写真館

朝倉文夫のこだわりがあふれた、アトリエ兼自宅だった朝倉彫塑館。気鋭の写真家・齋藤陽道が、展示作品と空間の織りなす館の魅力を切り取ります。



写真左上から時計まわりに、館のエントランスに展示された《雲》（1908）、玄関扉から差し込む柔らかな光、屋上に植えられているオリーブの樹、3階にある遊び心ある円窓、かつては塾生の園芸実習の場でもあった屋上庭園、まるで猫が生きているかのような《よく獲たり》（1946）、作庭のために日本各地から集められた中庭の石

齋藤陽道

1983年東京都生まれ。写真家。都立石神井ろう学校卒業。2010年、写真新世紀優秀賞受賞。写真集に『感動』『写訳 春と修羅』など。

『台東鳥瞰』関連企画「齋藤陽道 写真展」展示期間：2019年3月8日（金）～6月5日（水）

齋藤陽道が今号のために撮りおろした朝倉彫塑館の写真を厳選して館内に展示します。また、同館では朝倉文夫の彫刻作品の中から魅力あふれる男性像を集めた展示企画「独断で選んだイケメン★オシメン」展を同時開催します。

彫刻家・朝倉文夫のアサクリックな人物史

若くして頭角を現し、経済的にも恵まれた朝倉文夫は、自然や歴史に研ぎ澄まされた豊かな美意識を、制作環境や暮らしの随所にまで向けました。その美意識がどのように育まれ、成熟していったかを年表で追います。

1883-1902
（0～19歳）

大分県大野郡（現・豊後大野市）に生まれる。中学時代は一風変わった性格で落第ばかり。彫刻家の兄を頼って上京。兄のもとで彫塑を学ぶ。

1903~1904
（20～21歳）

東京美術学校（現・東京藝術大学）彫刻撰科に入学。アルバイトで横浜の貿易商のために動物の像の石膏原型を大量に制作。このときの経験が技術の礎となったと考えられる。またアルバイトで稼いだお金は、自分のためだけでなく、金銭に余裕のない学友の援助に使うなどしていた。

1907
（24歳）

東京美術学校彫刻撰科を卒業。谷中にアトリエを構える。このころより、弟子の育成もはじめる。

《墓守》のモデルを朝倉は「トルストイのような顔をした墓守」とのちに記述…！

1910（27歳）

自然主義への道を開く代表作《墓守》を制作。モデルは毎日学校に通うときに会う墓守の老人に自ら依頼した。

代表作となった《墓守》（1910）

1917（34歳）

美術審査委員会委員に任命されるなど、若くして彫塑界の第一人者に。

1931（48歳）

第5回朝倉塾彫塑展覧会にて一部野外展示を実施。本展図録に「大きな彫塑の置場所は屋外が最もいいように思はれる。」と書き残し、樹木や自然の中での作品鑑賞の端緒をひらいた。

上は《吊された猫》（1909）、下は《餌ばむ猫》（1942）

1935（52歳）

改築していたアトリエが完成。ほぼ現在の形に。塾の教育方針は独特で、「園芸」が必修科目であり、自然を観察する目を養うことが芸術性を高めるという自然主義的思想に貫かれていた。

屋上には菜園があり、土に触れ、野菜を育てることを弟子に伝えた！

1940（57歳）

東洋蘭の栽培に詳しい朝倉が、『東洋蘭の作り方』を発行。

1942（59歳）

随筆集『衣・食・住』、『民族の美』、『美の成果』をそれぞれ刊行。独自の美意識について多くの言葉を残す。

《原題不明（背伸びする）》（1919頃）

1964（81歳）

急性骨髄性白血病にて没。この年に開催された東京オリンピックにあわせ、「猫百態展」を構想していたが叶わず。

当初は俳句を志し正岡子規に師事しようとしたが、奇しくも上京した当日が子規の通夜だったとか！

娘をモチーフにした《姉妹》（1947）

青年のみずみずしい肉体をとらえた《友》（1955）

アトリエで愛好した猫に囲まれる朝倉文夫

アルバイトは上野動物園で象を写生していた際に、褒めてくれた大島如雲の一言がきっかけとなった！

藝大の若手・彫塑家に迫る！
現代を生きるアサクリック・アーティスト

朝倉文夫の母校、東京藝術大学。彼が学んでいた当時から１世紀を経たいま、塑像のあり方はどのように変化し、受け継がれているのか。２人の若手アーティストに話を聞きました。

写実と想像を往復する彫塑家
石下雅斗 Masato Ishige

東京藝術大学大学院彫刻専攻の修士課程に在籍する石下雅斗は、「テラコッタ」という土を焼成した素材を元に、物語性あふれる塑像作品を制作している。

特殊メイクを学んだ経歴を持つ石下は、豊かな想像力から、造形と物語を巧みに紡ぐ。「アートに限らず小説や映画など、世界観がしっかりとつくり込まれているものが好き。自分の物語に引き込んで、楽しんでもらえるものをつくりたい」と語る彼の作品は、正面だけでなく側面や背面など、どの角度から鑑賞しても、その世界観に入り込めるようディティールが描かれている。2 メートルを超す大きさの《いきみちの塔》は、近づいて目を凝らすと周囲を巡るように階段や回廊が形づくられており、その細部から物語の想像を広げることができる。俯瞰で見た際の造形のインパクトと、近接した際の細部と物語性。作品との距離感を変えることによって、複層的な鑑賞体験を見る者に促す。

上は《いきみちの塔》。右は、特殊メイク作品である《El Castillo》。下は、横たわる人物が島に見立てられ、木々が乱立する《忘れられた島》

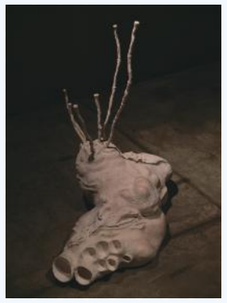
朝倉文夫は、自身のアトリエに光をふんだんに取り込み、制作中の作品を様々な光のもとで観察するように心がけた。対象を客観視し写実的に捉えようとした朝倉と、俯瞰した上でそこに個人の物語性を描こうとする石下。自分らしい表現を加えることで先達を乗り越えようとする若き彫塑家の姿が、そこにはあった。

1990 年東京都生まれ。2011 年、専門学校東京ビジュアルアーツメイク学科特殊メイク専攻卒業。14 年、東京藝術大学美術学部彫刻科入学。18年、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻入学

無意識下で物性と意味を切り離す
猿渡真緒 Mao Saruwatari

猿渡真緒は、無意識下にあるものを具現化し、作品にする。おぼろげに覚えている夢の描写や、人から聞いた興味深い夢から連想し無心でつくられるのは、目を瞑り静かに佇む柔和な女性像や、太古の生物を思わせるアメーバのような造形だ。作品の多くは乳白色の柔らかい色彩で塗色され、彫塑でありながら溶け出すような輪郭を持っている。興味深い点は、作品に至るまでに多くのデッサンやスケッチが描かれるにもかかわらず、実際の作品制作においては、無意識状態での造形が試みられることだ。

彫塑において写実や自然主義の表現を志した朝倉文夫は、そのいっぽうで、対象の物質性と元来の役割をずらすことで「アサクリック」な遊びを自宅兼アトリエで試みた。それはモチーフの観察を怠らなかった朝倉ならではの高度なユーモアだったと言えるが、猿渡の対象への向き合い方は、この延長線上にある。意図や意味から解放されることが困難な現代の情報社会において、



右は《浮標》。左上・左下は《my biotope ―寄生―》

彼女は無意識下で作品を制作することで、対象の物質性と意味を切り放そうとし、作品の周辺空間に余白地帯を現出させる。

スピードや効率が要求される現代社会で、アサクリックに通底する物との向き合い方は、必要性を増しているのだ。

1991 年神奈川県生まれ。2015 年、東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。同年、台東区長奨励賞受賞。17 年、同大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。同大学の塑像研究室助手として、現在に至る

台東アサクリック雑貨

釣りや生け花を嗜み、道具にもこだわる趣味人として知られた朝倉文夫が、いまの世で愛用するとしたらどんな雑貨？ 朝倉のお眼鏡にかないそうな品を集めました。

合理的なシンプルは美しい
VISION GLASS

コンクリートと木造という異なる建築様式でつくられた自宅兼アトリエにおいて、一見すると異質な素材同士を調和させる独自の世界観を生み出したアサクリック精神には、合理性と美しさが欠かせない。VISION GLASS は、インドのムンバイにある理化学メーカーがガラス管を加工して製造する、ごくシンプルな耐熱グラス。シンプルさゆえに、多様な世界を受け止めうる汎用性と機能美は、時には道具を自作するほどモノにこだわった朝倉と通ずるものがある。コップとしての用途以外にも、直火でご飯を炊け、オーブン料理も可能。ほか、カトラリー立てやペン立てなど発想次第で用途は無限大とも言える。全国の雑貨店やオンラインショップで取り扱いがあるほか、週に１度３時間だけ、台東区内の輸入元の VISION GLASS JP オフィスにて、直営販売を実施している。綿生産地インドの生成り帆布を使用したオリジナルラッピングはギフトや引出物にもうってつけだ。日常的に使う物にもこだわりを捨てなかった朝倉の世界を、日常使いのグラスから体験してみては。

VISION GLASS JP（直営店）
住所：台東区三筋 2-14-1 小市ビル 2F
営業時間：毎週水曜 17:00 - 20:00 ほか、イベント時など（当日に休みとする場合もありますので、あらかじめ Facebook ページをご確認ください）
TEL：050-3597-6852
URL：www.visionglass.jp

良いノートは文化をつくる
ツバメノート

まだ洋風のノートが珍しかった時代にオリジナルの用紙「ツバメフルース紙」から開発してつくられたツバメノートは、各界の著名人が愛用する名品。書き心地と蛍光染料を使わない優しい白さがこだわり。昭和 22 年から変わらない大学ノートのデザインは、パルテノン神殿の柱がモチーフ。全国の百貨店や文具専門店で手に取れる。

ツバメノート
住所：台東区浅草橋 5-4-1
TEL：03-3862-8341
URL：www.tsubamenote.co.jp

和の心とつくり手の遊び心
Kaze guru ma

デザイナーとつくり手の発想と技術をつなげて、暮らしになじむユニークなプロダクトを開発するブランド「+d」による、風車モチーフのマグネット。少しの風でもよく回り、写真やカードの上で回る姿が可愛らしい。新作は江戸切子の紋様や歌舞伎の隈取をモチーフとした「Kaze guru ma 和」。オンラインショップなどで販売。

アッシュコンセプト
住所：台東区蔵前 2-4-5
TEL：03-3862-6011
URL：h-concept.jp

猫好き朝倉文夫をめぐる、気ままな思索

晩年、百体の猫作品を展示するという「猫百態展」を企画しながらオリンピックに向け変容する東京で過ごした朝倉文夫。いっぽうで、現代の SNS 上で日々、無尽蔵に投稿される対象でもある「猫」を通じて、SNSにおける視覚文化に造詣の深い写真家・大山顕に、「アサクリック」という観点から自由に考えてもらいました。

旧朝倉文夫邸（現・朝倉彫塑館）に、枝の形のまま使われている柱がある。本来の意味や役割をズラして発想する「アサクリック」のひとつだという。この意匠に、都市インフラを専門に撮るフォトグラファーであるぼくは興味を持った。なぜなら東京という都市が巨大な繕いの集積にほかならないからだ。利用され尽くした街の中に高速道路を通さなくてはならなくなり、かつてのお堀を利用してそれをしのいだ、というのはその代表例だろう。東京が面白いのは、ままならない事情と折り合った結果が風景として表れているからだ。クリエイティビティは、自由ではなく制約から生まれる。高い技術を持ち思い通りに腕を振るえたであろう朝倉文夫は、もしかしたら制約を楽しんだのではないか。一階軒下の意匠はその表れかもしれない。

朝倉文夫が猫の像をたくさん制作したというのも興味深い。猫は人間の思い通りにならない生き物だからだ。今日、Instagram をはじめ SNS 上には猫写真があふれかえっている。朝倉文夫の猫像も、これら写真も、ままならない生き物をなんとか愛でようとした末のクリエイティビティではないかと思うのだ。

大山顕　1972 年埼玉県生まれ。主な著書に『工場萌え』（共著、東京書籍、2007）、『団地の見究』（東京書籍、2008）など。

グラフィックレコーディング＝片桐祥太

受け継がれるアサクリック

転機となった《墓守》以後、自然主義的写実を貫いた朝倉文夫。朝倉以後の彫刻が社会において、どのように変化していったのか。朝倉彫塑塾出身の2人の彫刻家、日名子実三、荻島安二の活動を通じて考察していきます。

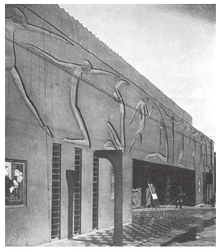
最初に、朝倉文夫の人柄を表す興味深い話から始めたい。1909 年に朝倉は、初期の代表作である《吊された猫》を発表した。このとき、彫刻家としてサラブレッドともいえる同い年の高村光太郎に、この作品の腕がかたいと批評されたという。しかし、しばらくして高村が洋行の資金を必要としていることを耳にした朝倉は、人を介して高村に「手」の作品をつくらせて、購入している。朝倉は、この《手》をさすが立派なものだとして書斎に飾り、弟子たちにも勉強しなさいと見せていた。これは、アサクリックを生み出す彼の好奇心と大らかな感性がよく表れている逸話だ。アサクリックという言葉は、朝倉彫塑館を見ると従来の型にとらわれない発想で創作に取り組む姿勢であることがわかる。このような朝倉の影響力は、弟子たちの多彩な活動からも読み取ることができる。ここではアサクリックの流儀が、どのように社会へ伝播していったのかを少し俯瞰してみたい。

朝倉の弟子に一風変わった人物が 2 人いる。日名子実三（1893-1945）と荻島安二（1895-1939）である。日名子は、宮崎県にある八紘之基柱や日本サッカー協会の八咫烏のエンブレムで知られている。八紘之基柱は、神武天皇即位 2600 年を記念した国の事業として 1940 年に建設された。彼は、世界がきな臭いさなかに軍の記章やモニュメントなどをデザインし、その時代の体制側に制作の場を広げた。もう1人の弟子である荻島は、我が国で初めて洋マネキンを創作したことで知られている。荻島の洋マネキンは、島津マネキンの製品として繁華街のショーケースに並び、日名子とは対照的に都市における消費空間を彩った。さらに彼は、村山知義らとともに葵館（1924 年竣工）という映画館の建設に関わり、外壁に女性を抽象化したきわめてモダンなレリーフを制作して話題になった。激動の時代の渦中にいた彼らは、つねに表現の場を社会に求めて、新しい時代の風景をつくろうとした。アサクリックの流儀は、このように彫刻の世界を超えて、より多くの人々が目にする場所へ広がった。

いつの時代でも新たな道を切り開く行為は、型にとらわれない自由な発想から始まる。大らかな感性によって新たな合理性を獲得していくアサクリックは、芸術文化における当時の既成概念から脱却することによって行われた。そういったことは、粉骨砕身しながら取り組むよりも、朝倉の言う“勝手気ままな”くらいがちょうど良いのかもしれない。自由な発想というのは、本来そのようなものなのだ。

八紘之基柱が描かれた昭和 19 年発行の十銭紙幣　日本銀行貨幣博物館所蔵

日本サッカー協会のシンボルマーク。＊2017年11月にデザインを変更。現在は使われていない。
画像提供：日本サッカー協会


荻島安二が 1924 年に制作した、葵館の正面レリーフ『建築新潮』（1925.1）

荻島安二が 1925 年に制作した、国産初の洋装マネキン（島津マネキン）
七彩所蔵

建築家　平井充

メグロ建築研究所代表取締役。DOCOMOMO Japan 幹事。実践女子大学非常勤講師、工学院大学非常勤講師。建築設計事務所を主宰しながら、近代建築の保存活動を行う。近代建築の保存改修プロジェクトも数多く手がける。

たいとう・アサクリック・シーン

学生、雑貨屋を営む夫婦、区役所職員と、台東区と様々なかたちで関わり合っている人たちはアサクリックをどのように解釈し、現在の台東区にその光景を見出すのか。彼らの思う台東区内のアサクリックを写真とコメントで紹介します。

❶隅田川にかかる厩橋際公衆トイレ

一見、美術館の展示品のように並ぶ男女の顔…と思いきや「トイレ」というジョークのような可愛らしい台東区の一面が改めて垣間見られました。

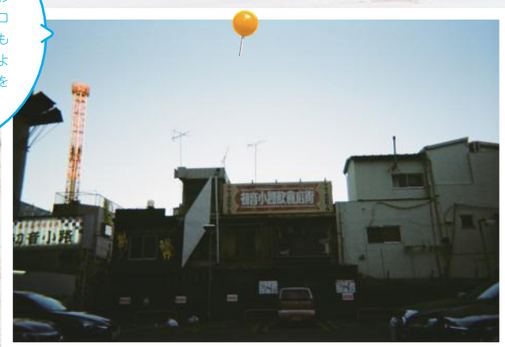
H・O さん
都内の大学に通う大学 4 年の女子大生。台東区の運送会社で 5 年バイトをしており、主に蔵前エリアを担当していました。

❷浅草寺裏の浅草 4 丁目

店の外装に歳月と青春を思わせるメッセージが書かれている粋なアートぶりがかっこよすぎて、撮影しました。

浅草寺や花やしきという目立った観光地の中に何食わぬ顔で立つ、やたらレトロな飲食店街。なんだか誰も知らない秘密を見つけたような気持ちでシャッターを切りました。

❸浅草花やしき近くの初音小路飲食店街入口



❹菊屋橋交差点前

巨大なコックが顔を出す浅草通り。ビルが建ち並ぶ街並みに自然と調和するその姿に、台東区らしい懐の深さを感じます。

❺ニイミ洋食器店に隣接した建物

異なる形・色・素材が特徴的な建物。まるで朝倉彫塑館を見ているよう。建物の設計者に、朝倉文夫のようなユーモアを感じて撮影しました。

❻アメ横通り摩利支天 徳大寺

お店とお寺という別々の存在が、同様に賑わいながらアメ横というひとつの空間を作りだしている点に、地域特有のアサクリックを感じてシャッターを切りました。

K・O さん
台東区役所に勤める茨城県出身の男性。『台東鳥瞰』の担当者でもある。日々、職員として業務に邁進中。

❼谷中 3 丁目

窓を補修しているテープや古びた鉄格子などすべてが絵になると思い、割れた標語標識（?）に想像力がかき立てられた。「は、やめよう」なのか「はやめよう（早めよう）」なのか。

ペットボトルを利用したプランター（?）がまさにアサクリックだと思った。毎日のように通っている場所にあったのに何年も気がつかなかったのは、それだけこのオブジェがその場所に似合っているからなのかと。

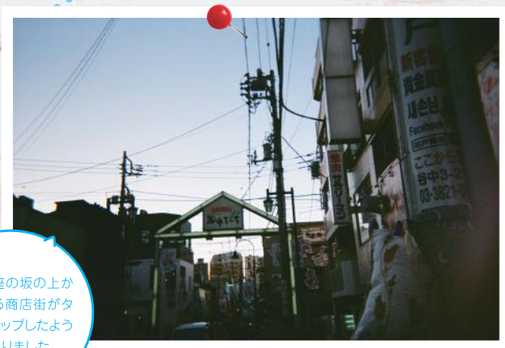
❽寿 1 丁目

❾谷中 3 丁目（ワト舎の入り口）

我が家のアサクリックはなんだろう?と考えたとき、下駄箱を猫アパートとして使用しているところがそうではないかと思って撮影しました。

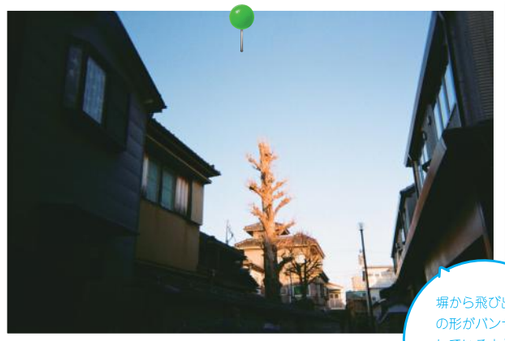
ワト舎 シャントルウさん
日本をこよなく愛するフランス人と、日本のものづくりに魅了された日本人夫婦の店「ワト舎」。2016 年から、日本各地の丁寧な手しごとにこだわった商品のほかに、オリジナルのグッズも展開している。

❿谷中銀座入り口



谷中銀座の坂の上から見える商店街がタイムスリップしたようで気に入りました。

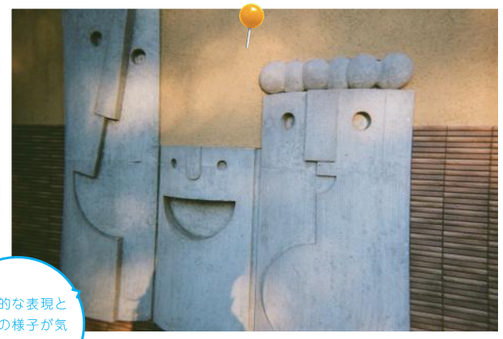
⓫妙法寺



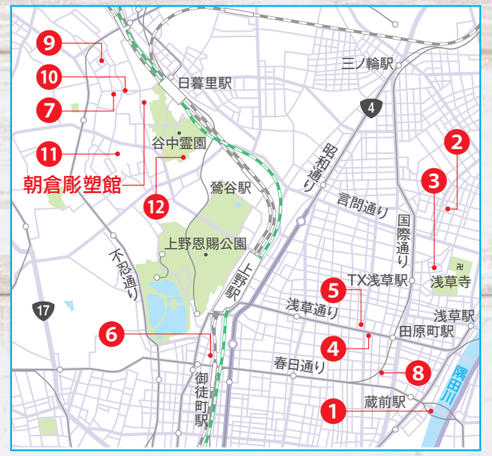
塀から飛び出す木の形がバンザイをしているように見えたので撮影しました。

M・O さん
都内の大学に通う大学 3 年生。台東区は、父親の出身地でもあり、自宅から大学までの通学路として日々通っている。

⓬谷中霊園入り口の公衆トイレ



個性的な表現と家族の様子が気に入りました。



撮影機材提供 lomography

台東区を見渡す カルチャー・レビュー

台東区で開催された、様々な文化イベントを振り返ります

藝大と区民が、歓喜の詩でひとつになる！

第 38 回

「台東第九公演」下町で第九

@ 東京藝術大学奏楽堂

ベートーヴェン交響曲第九番「合唱付」。そのなかでも第四楽章はシラーの詩「歓喜に寄す」を引用し高らかに人類愛を謳う名曲として、世界的にも、そして日本でも特に年末の時期に、様々な場所で演奏されてきた。「台東第九」も、台東区に関わる藝大フィルハーモニアと台東区民合唱団によって区をひとつにする象徴的なイベントとして、38 回目を数えている。ベルリンの壁崩壊記念コンサートで平和の象徴として演奏されたことは有名だが、母音の明瞭な合唱や、正確なスタッカートの二楽章弦楽器などは、本来のドイツ人らしい曲と詩が、日本人らしい第九としてこの地でも愛され、台東区に定着していることを実感させた。

開催：2018 年 12 月 16 日
場所：東京藝術大学奏楽堂（台東区上野公園 12-8）
藝大フィルハーモニアと台東区民合唱団によって毎年開催される、ベートーヴェン交響曲第九番「合唱付」の演奏会。指揮は東京藝術大学長の澤和樹。同日は、ベートーヴェンの誕生日でもあった。

藝大の玄関口で若き才能と出会う

くうねるほる-東京藝術大学彫刻科 非常勤講師 6 人展

@ 藝大アートプラザ

東京藝術大学で制作指導をする 6 名の若手による、木、石、金属などの各種素材を用いた彫刻展。彫刻制作は「食べることや寝ることと等しく生活の一部」として、つくり手の息吹を見せた。会場の藝大アートプラザは東京藝術大学と小学館の共同事業として昨年 10 月にオープンしたばかり。常設展コーナーでは藝大の 2 学部 14 学科の教員や、学生、卒業生らが制作した作品を常時展示・販売している。誰もが気軽に所有する楽しみに触れられる、いわばアートの産地直売所である。専門書からマンガまで扱う総合出版社・小学館とのコラボで、より“はじけた”プロジェクトが期待される。

会期：2019 年 1 月 9 日～2 月 3 日
場所：藝大アートプラザ（台東区上野公園 12-8 東京藝術大学美術学部構内）
藝大の図書館棟を改装して開店したもので、一般にも開かれているショップ。藝大の学生をはじめ、教職員、卒業生の作品を中心に展示・販売。そのほか共同企画品、お土産品、チケットや書籍なども展開する。

たいとう文化発信プログラム

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を契機として、台東区内の文化・芸術に関わる様々な取り組みを PR し、世界に誇れる歴史と文化を持つ区の魅力を国内外へ発信することを目的として策定されたプログラムです。このプログラムを通じて、観光客はもちろん、区内に住んでいる方や働いている方にも台東区の魅力を発信していきます。

たいとう文化発信
Culture of Taito City

ロゴマークデザインについて

台東の文字を変形させたマーク。「多様な文化を和える（あえる）」というテーマで、様々な文化が混ざり合って形成された台東区を、異なる 3 つの形で表現しています。

台東区文化芸術総合サイト「たいとう文化マルシェ」

台東区内の魅力あふれる文化イベント・文化施設・展覧会レポートなどを紹介する文化芸術総合サイト。あなたの文化イベントも登録可能。
www.culture.city.taito.lg.jp

『台東鳥瞰』とは

台東区が持つ魅力は、世界的な観光スポットやイベントに留まらず、ひっそりと続く伝統や日常に息づく習慣など、実に多様です。『台東鳥瞰』は、それらを鳥瞰し見直すことで新しい発見や気付きを提供する、年 2 回発行の文化芸術広報誌です。

発行日　2019年 2月 15 日
発　行　台東区 文化産業観光部 文化振興課
監　修　緒方信行（熊本大学教授）
企　画　田尾圭一郎、髙橋隆郎（美術出版社）
編　集　友川綾子
A　D　佐藤亜沙美（サトウサンカイ）
印　刷　凸版印刷株式会社
協　力　台東区立朝倉彫塑館

TAITOCHOKAN TAITOCHOKAN TAITOCHOKAN TAITOCHOKAN